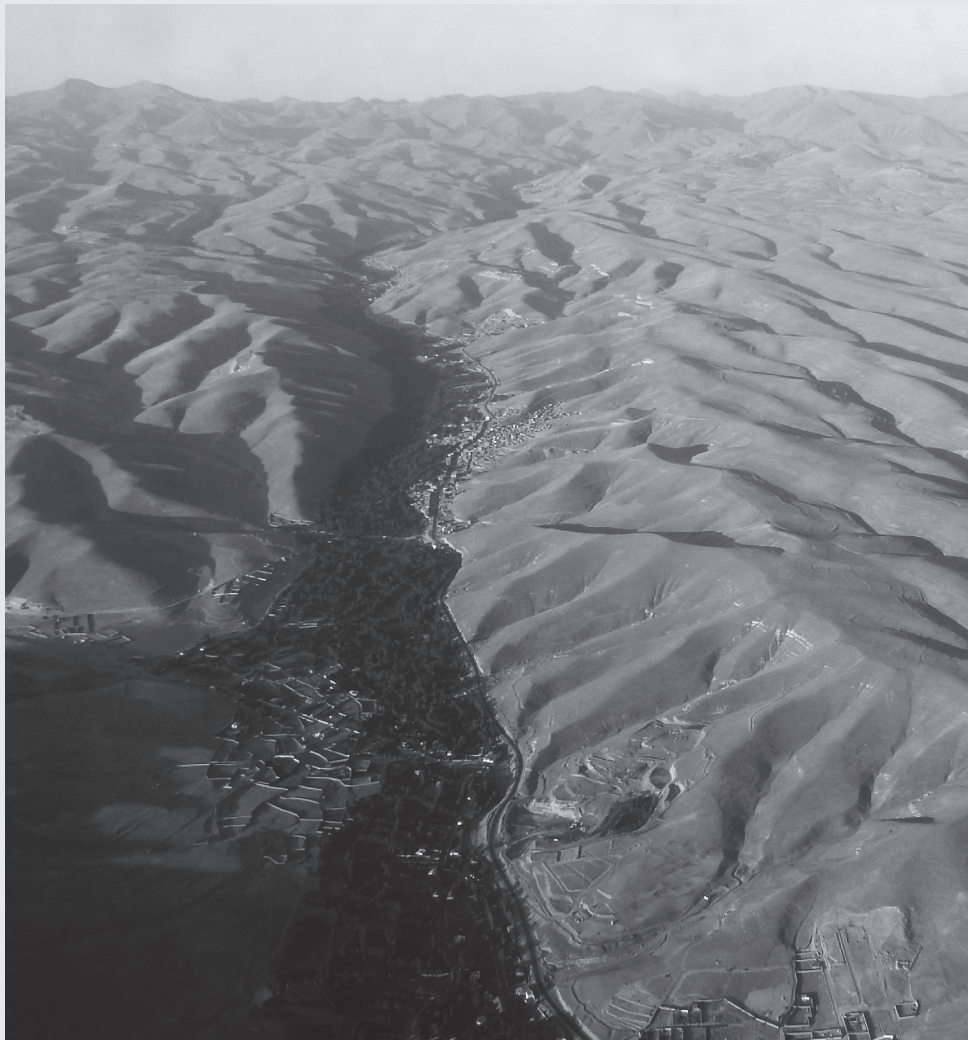


ふるさとの山脈によせる頌歌

シャフリヤールとアゼルバイジャン語詩

石井 啓一郎



石井啓一郎 ダブリーズ近郊空撮

※本書に掲載した写真は全て著者が撮影したものである。

第一部 講演

皆さん、改めて明けておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

私は以前に、『中東現代文学リブレット^{※1}』や『ワタン論集^{※2}』にアゼルバイジャンの文学についていろいろ書いてまいりましたが、今日は、イランのアゼルバイジャン語詩人であるモハンマドホセイン・シャフリヤール(Mohammad-Hosseini-Shahriar) のことを中心にお話をさせていただきたいと思います。

1. シャフリヤールという詩人

モハンマドホセイン・シャフリヤールという詩人は 1906 年に生まれて 1988 年に亡くなりました (009 頁 略年譜参照)。ペルシア語現代詩において、いわゆる叙情詩の領域で高い人気を誇る詩人です。彼の作品の作風を一言で言いますと、ガザルやマスナヴィーといった古典の詩形式を活かした作品を得意としていました。作品中に口語的な用語法を織り込みながら、基本的には新古典主義的な傾向を示す詩人と言えるでしょう。

もう一つに、立憲革命^{※4}とイラン革命^{※5}という、イラン近現代史の中で二つの革命の時代を体験的に知っている詩人であると言えます。1979 年のイラン革命の後には、結構、革命礼賛的な詩もいろいろと書いてもいます。その意味では、例えば昨日の研究会で、鈴木珠里さんがお話してくださったスィーミン・ベフバハーニー^{※6}は、イラン革命、そしてイラクとの戦争という全国民的悲劇も含めて、人々が肌身に感じて体験したイラン革命そのものの変容を前に、時には政府批判的な立場にも立って、イラン政府から行動に制限を加えられたり、場合によっては身の危険が生じることを経験してきた人です。これに比べるとシャフリヤールは、端的に言えば体制の論理に即して平板に、そして手放しに革命を礼賛するような詩をかなりの数、ペルシア、アゼルバイジャン両語で書いているように見えます。

例えば、彼のアゼルバイジャン語作品にこんなものがあります。彼の「人を造る我らの革命（İnsansaz İnkilabimiz）」という詩ですが、これはイラン革命初期、おそらく 1981 年にイランのイスラーム共和党の建物がいわゆるモジャーヘディーンによる爆弾テロに遭った頃^{※7}に書かれたと思われます。一部分の抜粋ですが、これを見ていただくと

イスラーム共和国党は爆破に遭った
べヘシュティーたちのような我らのこの土壌
ムハッラム来たり、アーシューラー来たり
焰は我らの怒りを引き出すだろう
ミフラーブの殉教者^{シャヒード}アサドッラー
我らが酌、我らの酒——それは血潮
アーシューラーは我らの学び場
血で書かれた我らのこの書
(……)
アヤトッラー・マダニーのように
陽は沈もうと、我らに月明かりがある
アヤトッラー・マシュギーニーの光のように
我らの祈りは聞き入れられよう^{ドゥアー}
ラジャーイーが逝けば、ハーメネイーが来る
我らの選択には、千枚でもカードがある^{※9}

イスラーム共和党が爆破に遭ったべヘシュティーとか、革命に殉じた指導者の名前を憶える詩となっています。たとえば「ミフラーブのシャヒード、アサドッラー」とは、タブリーズのモスクで金曜礼拝中にモジャーヘディーン^{※10}の爆弾テロのために暗殺されたアサドッラー・マダニー師（アヤトッラー）の名前です。革命後のイランでは、ミフラーブで殉教したのは西暦 661 年にクーファのモスクで礼拝を執り行っている最中に受けた襲撃で暗殺された 4 代カリフのアリー・ビン・アブータリーブ以来とされ、マダニー師を「ミフラーブの第二の殉教者」と呼んでいます。この中に「ラ

ジャーイーが逝けばハーメネイーが来る」とありますが、もちろん、これは今のイランの最高指導者であるアリー・ハーメネイー^{※11}師です。こういう革命礼賛詩というものも書いている人物です。

昨日の研究会で鈴木珠里さんがお話しして下さったペフバハーニーの「再び君を造ろう、祖国よ」という詩と比べてみると、革命時代に書かれた詩としては、だいぶ内容や雰囲気が違うと思われるかもしれません。革命に対するシャフリヤールの立場というのは、また後の方でも少し考えたいと思います。シャフリヤールが望んだかどうかはともかくとして、今のイランで政治的に当たり障りのない詩人という見方をされることがあります。2021年現在、あるいは2009年にイランじゅうが民主化の動きで荒れたあの頃^{※13}を知る人たちから見ると、シャフリヤールに違和感を覚える、あるいは端的に嫌いだ、と思う人もいます。

2. シャフリヤールの生涯とイラン現代史

2-1. 立憲革命とシャーの反動クーデター

シャフリヤールは1906年に、今の東アーザルバーイジャン州の州都であるタブリーズで生まれています。彼の生まれた年というのは、まさに立憲革命只中の年でありまして、1906年に、シャーがイラン憲法の第一部を、翌1907年には第二部を認証しています。ただ、1906年の憲法認証というのは、もう死に瀕した先代のシャーが、亡くなる直前に駆け込み的に認証した感がありまして、ほどなくシャーの位を継いだ皇太子モハンマドアリー・ミールザーは、父が認めた憲法を何とか押し戻したい、自分が専制君主の立場に戻りたいという考えをもっていて、1908年の6月30日にテヘランで自ら反動クーデターを起こします。

シャーが自ら反動クーデターを起こし国会を攻撃するというようなことになってしまい、テヘランでは実際に立憲派が総崩れ状態になりました。しかし、このとき、タブリーズでサッタール・ハーン^{※14}という人物が出てきました。彼はのちには立憲革命を守った功績を讃えられて、「国民将軍（サ

ルダーレ・メッリー)」という称号を与えられる人物です。正規の軍歴の中に出自を持たぬ彼を定義上「将軍」、つまり「軍人」として呼ぶのはちょっと違うかもしれません。むしろ一種の義士が、民兵組織を率いて、地元の軍事的な抵抗運動を指揮し、結果的にイランの立憲運動をみごと守りぬいた、と言うのがより実態に沿っているかと思います。幼いシャフリヤールはそんな時代に育ちました。

シャフリヤールのお父さんは、タブリーズがこういう武力衝突に巻き込まれることを見越していたと言われ、子供と奥さんを自分の出身地で、タブリーズ南東にあるホシュゲナーブという小さな村（現東アーザルバーイジャン州のボスターナーバード郡）に疎開させます。このホシュゲナーブという村には、のちのシャフリヤールの代表作であるのみならず、現代アゼルバイジャン語文学を代表する名作として広く知られる連作詩「ヘイダルババよ、ごきげんよう」に詠われる、ヘイダルババという山があります。

ヘイダルババは、タブリーズから直線距離でだいたい 100 キロ。テヘランに向かう幹線道路をしばらく飛ばしてから、街道を畠道に逸れて、あとはなだらかな丘陵の中の細道を辿ってゆきます。タブリーズから片道 1 時間 20 分から 1 時間 30 分程度で着きます。

シャフリヤールは、1911 年から村のモッラーが運営する私塾で初等教育を受け、1921 年にはガージャール朝時代にイランで最初の西欧に倣った近代的教育機関としてテヘランに作られたダーロールフォヌーン^{※16}に進学します。その後、医学専門学校に進みました。



ヘイダルババ山



山地と溪谷



ホシュゲナーブへの道

ところが 1929 年から 30 年に学業を断念してテヘランから去ることになります。実はこの辺には、伝説を信じるか信じないかという面が多分にあるのですが、彼がテヘランを去った理由は、恋愛トラブルであったと言われています。当時、彼が結婚も視野にいれて付き合っていたソライヤという軍人の娘がいました。しかし、パフラヴィー朝のレザー・シャー※17の親戚筋、あるいはシャーの周辺の権力者が彼女に横恋慕して、この娘にくっついている訳の分からない医学生を追い出してしまう、と力を濫用したらしいのです。いくつか説はありますが、このよからぬ行動に及んだ人物は、レザー・シャーの親戚筋のチェラグ・アリー・ハーン・パフラヴィーという人物であったようです。

真相は分かりません。ただ事実として学業を断念した彼はテヘランを退去します。そしてイラン北東部ホラーサーン地方のニーシャープールに移転します。そのとき、彼に何らかの政治的意思が介在する迫害が及んだのは確かなようで、例えば 1934 年にお父さんがタブリーズで亡くなったときも、葬儀のためにタブリーズへ戻りたくとも移動が許可されませんでした。そのような状態でニーシャープールに暮らしたときは、「ニーシャープールにて (Dar Nishābūr)」という鬱屈したペルシア語の詩を書いています。それについては後で多少触れます。

018

2-2. アゼルバイジャン危機

その後、1941 年から 46 年の間に、彼自身の言葉によれば、テヘランにあって「心労と絶望」のために病気で倒れていたという数年を過ごします。その「病気」の期間とは第二次世界大戦と同期するイランの激動期です。特に「1946 年」ですが、前年 1945 年から 46 年にかけて、つまり第二次世界大戦が終わって世界が冷戦時代に突入する時期に、イランでアゼルバイジャン危機という一つの重大な政治事件が起きています。

イランは第二次世界大戦のときに、国王レザー・シャーがヒトラーの側につきしました。1941 年からドイツが東部戦線へ戦端を開き、いわゆる独ソ戦が勃発するといよいよ、ナチス・ドイツの工作員の動きを封じるため

に、イギリスとソヴィエトがイランに武力介入して占領してしまいます。このとき、アゼルバイジャン地方はソヴィエトの軍隊の占領下に置かれます。ソヴィエトとイギリスの占領下でレザー・シャーが退位したとき、イランの内政には大きな地殻変動が起きました。その流れの中で 1945 年、アゼルバイジャンにミール・ジャアフアル・ピーシェヴァリー^{※18}が率いるアゼルバイジャン民主党という組織ができて、アゼルバイジャン自治政府というものを組織し、過激な地方自治政策を断行します^{※19}。自治政府は結局、1946 年に中央政府の軍事介入によって完全に瓦解します。軍事介入に敗退したというよりは、ソヴィエト軍の撤退によって結果的に梯子を外された格好になり、またイランの中での政治的な舵取りの拙さで自己崩壊を招いたのが実情でした。

このアゼルバイジャン危機の意義は、一時的にでもイランの内政において、エスニシティという問題がイランの国民的統合のアキレス腱になりかねないという事態を作り出してしまったというところにあります。1946 年のアゼルバイジャン自治政府の崩壊後は、イランの中でのアゼルバイジャン語の公用や書物の刊行が禁じられ、アゼルバイジャン系国民にとっては息苦しい状況が現出します。

019

そんな状況の中で、シャフリヤールは 1950 年から、さきに申し上げたアゼルバイジャン語の連作詩「ヘイダルババよ、ごきげんよう (Heydərbabaya Salam)」(以下「ヘイダルババ」)を作り始めます(その間に 1952 年にお母さんが亡くなっています)。1954 年に彼は『ヘイダルババ』の第一部を刊行します。なお同年に、タブリーズでアズィーゼ・ハーノムという女性と結婚、その後、二人のお嬢さんと一人の息子さんが生まれます。1964 年に『ヘイダルババ』の第二部が刊行されます。

1968 年頃からイランのアゼルバイジャン語詩人であるブルド・ガラチョルル・サハンド^{※20}という人物との交流が始まります。1968 年に「ヘイダルババ」を読んで熱烈に感動したサハンドが、彼に接触したいというアゼルバイジャン語の韻文書簡、つまり詩の形式で書かれた手紙を送り、そこからある種の付き合いが始まりました。サハンドから受け取った韻文書簡への答礼の詩として、シャフリヤールは 1970 年に「サハンドよ」というア

ゼルバイジャン語詩を書いています。

ここでサハンドという詩人についても簡単に触れておきます。サハンドはいわば雅号で、本名はブルド・ガラチョルル。この名前はペルシア語ではなくテュルク系です。彼はかつてイルハン朝の王都であった古都マラーゲ生れのアゼルバイジャン語話者なのですが、象徴的なのは、彼が生まれたときの命名のエピソードです。彼の名のブルドは「雲」のことです。トルコ人は昔から子供に名前を付けるとき、その子が生まれたときの自然現象や気象現象にそった命名の習慣があったので、お父さんは彼が生まれたときの天気から自分の息子の名前を雲にしたのだそうです。しかしイランで戸籍係に届けようとしたところ、ブルドというのはペルシア語でないからダメだ、ペルシア語として意味をなさないが「ペルシア語風」な「ベフルード」という名前にしろと戸籍係から言われた、という逸話が伝わっています。

彼はアゼルバイジャン民族主義者になっておりまして、さっき申し上げた 1945 年のアゼルバイジャン自治政府ができたときも、その文化サークル、青年文化部みたいな組織に加わって、自治政府崩壊の折には、しばらく投獄されています。

資料編の最後に、詩人サハンドが 1974 年にモスクワに行ったときに、ヘイダル・アリエフに宛てた韻文書簡を載せております (137 頁参照)。ヘイダル・アリエフは、当時のソヴィエト共産党の中で、アゼルバイジャン出身者としてはいわばトップエリートで、当時はソヴィエト連邦共産党中央委員会の政治局員の地位を占めていた人物です。ソヴィエト末期のゴルバチョフ時代に一度失脚しますが、しばらく続いた政情不安のさなか、出身地のナフチュヴァンから政治の世界に再び打って出て、最後は独立後のアゼルバイジャン共和国で第 3 代大統領になった人物です。

サハンドはイランのアゼルバイジャン民族主義詩人で、当時のソヴィエトの政治エリートに宛ててこういう詩を送っている。また、そもそもこの時代にイランからモスクワを訪問することができた。その事実からだけでも、彼がどういう思想的、政治的なスタンスの人であったか、概ねご想像いただけたと思います。さきほど「ある種の付き合い」という妙な言い方をしたのは、当然、当時のイランにおいて自分の身を守る意味もあったで

しょうが、シャフリヤールはサハンドとの接触には相当に用心深い姿勢を保っていて、度重なる要望にも直ぐには面会に応じませんでした。

ちなみに当時、『ヘイダルババ』がアゼルバイジャン語話者の間で非常に人気を博したということで、シャフリヤールについてもバクー訪問の機会を作ろうという企画がありました。18世紀のアゼルバイジャン語古典詩人モッラー・パナーフ・ヴァギフ^{※22}の生誕250周年に、その記念行事の企画に合わせてソヴィエト側がシャフリヤールをバクーに招待しようと動いたらしいのですが、これはイランのシャーの政権が彼の出国を認めず、実現しなかったということです。

1978年にサハンドはイラン革命を前にして亡くなりました。なおテヘランの書店で訊いた範囲では、まだイランではサハンドの作品は基本的に発禁だそうです。もちろんインターネットからのダウンロードや、タブリーズ辺りの道端に居座る露天商から入手できる可能性はあります。しかし、今日、翻訳して皆さんにお配りしている一篇、つまりサハンドからシャフリヤールへ、そしてシャフリヤールが答礼詩として「サハンドよ (Səhəndim)」を寄せた韻文書簡だけは、シャフリヤール作品集の中に収録されて読むことが可能です。

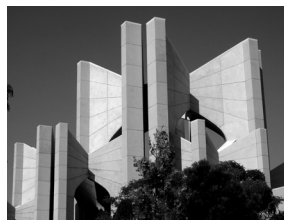
021

2-3. イラン革命

1978年から1979年にかけてイラン革命が起こります。1979年の1月16日にパフラヴィー朝第2代国王モハンマドレザー・シャー・パフラヴィー（日本のマスコミでは今も「パーレビー国王」との表記を多いようです）がついにイランを後にして、ここにイラン革命が成就します。イラン革命成就の後、1988年、イラン・イラク戦争が末期に来た頃に、シャフリヤールはテヘランで亡くなっています。

テヘランで亡くなる一年くらい前に、彼は親しかった人たちに、これまで書き留めてきたアゼルバイジャン語の詩をまとめて本にして欲しいと頼んでいました。この頃からシャフリヤールの手書き原稿をかき集める形で、アゼルバイジャン語の詩が刊行されています。彼が亡くなった翌月、メヘ

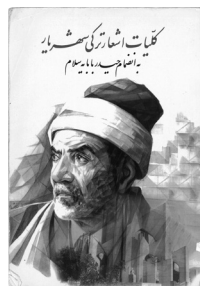
ル月 10 日^{※23}に、最晩年の希望どおりに『シャフリヤール・トルコ語詩全集』が Kollīyāt-e ash'ār-e torkī-ye Shahriyār というペルシア語タイトルで発刊されます。



シャフリヤール墓所 外観



シャフリヤールの墓



『シャフリヤール
トルコ語詩全集』

3. シャフリヤールのアゼルバイジャン語詩

022

最初に申し上げたとおり、まずシャフリヤールという人物はイランのペルシア語詩人です。シャフリヤールのペルシア語の詩集として刊行されているものは、大雑把に言って詩の本文で 1380 頁程度、辞典のような厚さの本が 2 巻になるくらいのボリュームがあります。それに対して、シャフリヤールが生涯に書いたアゼルバイジャン語の詩は、付随的なペルシア語による執筆を含めても作品本体で大雑把に 260 頁程度です。必ずしも量がすべてではありませんが、シャフリヤールがその生涯に書いた作品では、ペルシア語の詩の方が分量的には圧倒的に多いと言えます。しかし、アゼルバイジャン語現代文学の中では、アゼルバイジャン共和国とイランの両方にまたがって、彼の詩は一種の共有財産のように愛されています。

シャフリヤールのアゼルバイジャン語の詩の中では、二部構成で 125 編の短い 5 行詩から成る「ヘイダルババ」と、サハントとの間の韻文書簡から生まれた「サハントよ」が、まとまった作品として一番規模の大きいものになると思います。その他は、いわゆる韻文書簡というジャンルの詩が量的に結構比重を占めています。この形式の作品には、さきほど申した詩人サハントに寄せた 1970 年の長大な「サハントよ」が含まれます。そ

の他にも当時のソヴィエト・アゼルバイジャン側で言語を共有する、例えばマッマド・ラヒムとか、それからスレイマン・リュスタム^{※25}といった文化人、詩人とか文学研究者との間に交わした韻文書簡が散見します。

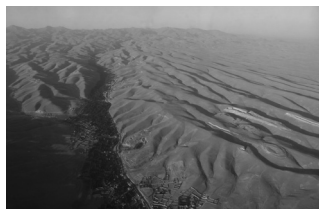
4. 「ヘイダルババ」 牧歌的回想から同時代の社会批判へ

4-1. 「ヘイダルババ」

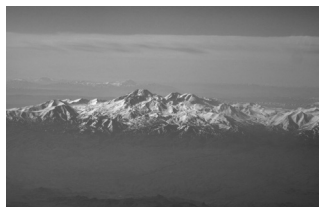
「ヘイダルババ」という作品に話題を移します。『中東現代文学選 2016』にも、また、2015年に宮下遼先生と鈴木克己先生のお二人とひとっしょに基調講演を行ったシンポジウムの配布資料の中に私が訳しました「ヘイダルババ」の抄訳を載せておりますが、今回、このような発表をさせていただくということで、「ヘイダルババ」125篇の詩をやっとすべて訳しました。

題名にあるヘイダルババは、さきほど申し上げたとおり、ホシュゲナーブの村にある山の名前です。イラン北西部のアゼルバイジャン地方は、アラス河の北（現アゼルバイジャン領・ナフチュヴァン自治共和国）が小コーカサス山脈の南東の端にあたり、イラン高原北西部からアナトリア東部まで繋がる火山帯の上にある山国です。この火山帯はトルコ南東の最高峰アララト山や、イランの秀峰サバラーンやサハンドも擁しています。タブリーズの村では、そんな大山脈からの支流のように、どこを見渡しても山並みが単調に連なる風景が特徴的です。ホシュゲナーブの村はそんな山脈の溪谷に位置して、そこに見える何の変哲もない、さして印象に残らない山のひとつがヘイダルババです。その意味では、このシャフリヤールのアゼルバイジャン語詩にその名が残らなかったなら、誰にも知られずに終わったであろう山です。翻訳資料と

023



タブリーズ上空



サハンド山

して掲載した中でも、自負心に満ちた詩「わたしは海をつくった (Dərya Elədim)」(126 頁参照) に彼自身、次のような言葉を入れています。

見よ、ヘイダルババは伝説にあるような、ガーフの山になった
わたしはひとつの小山を不死鳥の赴く処にした

しかしシャフリヤールには、自らが幼年時代を過ごしたホシュゲナーブの村が、伝記的にも、生涯にわたる精神面においても、ひと処へ収斂する「自分のワタン(祖国、故郷)」であるという意識があって、そのワタンを象徴する山の名前を詩に詠みました。この「ヘイダルババ」は、第一部、第二部を簡潔な 5 行の詩形式で全 125 篇を構成していますが、すべて基本はこのヘイダルババという山への呼びかけになっています。

まずこの詩形式がどのようなものが概観してみましょう。ここに例として引用したのは『ヘイダルババ』第一部の第 14 篇を、アゼルバイジャン共和国でのラテン・アルファベット正字法で書き下し、語彙の係り結びや直訳的意味を簡単に図式化したものです。

024

Xəzan yel① yarpaqlar-ı tökən-də

秋 風(の)-が 葉(複数形)-を 放り出す [動詞 tökmək の分詞ən 形+位置格助詞]

Bulud dağ-dan yenib kənd-ə çökən-də

雲が 山-から 降りて 村-へ 定着・定住する [動詞 çökmək の分詞ən 形+位置格助詞]

Şeyxülislam gözəl səs①n(ı) çəkən-də

シェイヒュルイسلامが 美しい 声(その)-を 引き出す [動詞 çəkmək の分詞ən 形+位置格助詞]

Nisgilli söz ürəklər-ə dey-ər-di

愁いをおびた 言葉が 心(複数形)-に 語っ(てい)た [動詞 demək の未完了過去表現]

Ağaclar da Allah-a baş əy-ər-di

樹木(複数形) も アッラー-に 頭(を) さげ(てい)た [動詞 əymək の未完了過去表現]

この5行詩がどう作られているかご覧いただくと、基本は、1行11音節で5行構成です。最初の3行と後半の2行でそれぞれ語末母音が韻を踏むようになっています。

たとえばこの1行目を音読すると「ハ・ザン・イエ・リ、ヤル・パグ・ラル、トゥ・カン・ダ (Xə-zan ye-li/ yar-paq-la-rı/ tö-kən-də)」と、11音節の構造は4音節+4音節+3音節という形で、いわば「四四三調」ですね。日本的にいうと七五調みたいなもの、あるいは五七五七七みたいな定型が、ここでの四四三調です。基本的にはこの4、4、3がひとつのリズミ的なパターンとなって「ヘイダルババ」は作られています。

この例をご覧いただくと、トルコ語を勉強なさっている方はすぐお分かりだと思うのですが、最初の3行末の *tökən*、*çökən*、*çəkən* は動詞から派生するいわゆる分詞形なのですが、アゼルバイジャン語ではこの分詞形に位置格を表す助詞の「ダ」を付けると、人称とかアスペクトを示す動詞の活用形をきっちり作らなくても、定動詞をかなりの程度まで代用できるという特徴があります。この「-əndə 形」は「ヘイダルババ」全編を通じてごく頻繁に使われています。この用法は言語的に抑制されて、簡素、平明なスタイルを作り出しています。

025

「ヘイダルババ」という連作詩は今申したような簡潔な詩体を統一的な枠組みとして、内容は一篇完結。それで一篇ずつが静止画のスナップ写真みたいな印象を与えます。翻訳論的にはこの極度の簡潔さが却って解釈を難しくするとも言えますが、「ヘイダルババ」は、タブリーズの方言独特の語彙や風物、事物の理解が難しいことを別にすると、全般には割合に読みやすい詩です。

詩の主題は、特に第一部は子供の時代の目線に戻ってホシュゲナーブの村の風物や生活の点描、その中で自ら抱いた様々な感情や心象を描いています。

例えば、「ヘイダルババ」の詩の中で、第27篇とか第31篇というところを見ていただくと、当時の村の中でのノウルーズの時期の情景を描いています。第27篇は子供の頃にあったノウルーズのお年玉の思い出です。第31篇は、イランではチャハールシャンベ・スーリーという大晦日の最

後の水曜日の習慣を描いているものです。火の上ではなく、水を飛び超えるというような習慣がタブリーズにはありました。

第 31 篇を見ていて一つ面白いのは、バクーからの来訪者が届ける手紙という言葉が書かれていまして、1908 年の頃、つまりソヴィエトの時代以前であれば、彼が子供の頃はバクーとタブリーズの間は、割合簡単に行き来できていたんだ、ということがここから分かると思います。

第 35 篇、第 40 篇、それから第 44 篇は、村の生活の中で狼というものが、リアルな恐怖であったと分かる作品です。第 40 篇で、「狼は老いて歯が抜けた」と書かれていますが、どういうことかということ、薄日が差ししている日に雨が降って虹が出ると、それは狼が子供を産んでいるか、それとも狼が年老いて歯が抜けたかどっちかだ、というようなフォークロアがアゼルバイジャンにあったそうです。虹が出るときというのは、狼は無害な存在になっているとき、という迷信です。第 40 篇で「太陽は雲のなかで糸紡ぎを回す」とは、雲の中に太陽が隠れた状態で虹が出た、というメタファーです。だから今は狼が危ない存在ではなくなっている、という含意があるのです。第二部でも狼という存在は、たとえば第 110 篇の「人は貪欲な狼のように飢えている」「しゃがみこんで怒気をはらんだ様子で戸惑っている」に登場します。要するに人は人に対して狼であるというような、殺気だったというか、精神的な風土が荒んだ状態を描いています。これは第二部の他の詩との並びの中で、1960 年代に至ってのホシュゲナーブの様々な意味での荒廃を描いている一篇であり、そこに狼というモチーフが呈示されます。

今の話を一旦纏めると「ヘイダルババ」の第一部にある 76 篇の詩は、多くが子供の頃の記憶を甘美なもの、苦いものを含めて、懐かしい点景を綺麗なスナップ写真に昇華させるような詩篇で構成されています。ところが、第一部の発表から約 10 年を経て、ホシュゲナーブを再訪したのちに書かれた第二部（第 77 篇から第 125 篇まで）はこれと毛色が変わってきます。ここでは、再訪して目の当たりにしたホシュゲナーブの「今」への思いをシャフリヤールは吐露することになります。歳をとって故郷に戻って来てみたら、そこが今どうなっていたか。そこには、昔、自分と一緒に

遊んでいた女の子が孫の手を引いている姿をみて、自分も歳をとったんだと実感するというありきたりな感慨の向こうにある老いと死への想念も含まれます。しかし、そこにさらに映し出されるのは、ひたすら苦々しい故郷の現実でした。

4-2. シャフリヤールにおける「ワタン」

さきほど、シャフリヤールにとっての「ワタン」は、ここホシュゲナーブに収斂すると申しましたが、まさにホシュゲナーブを「ワタン」と同定する詩句が第二部には登場します。

第 112 篇をご覧ください。ここに「ヘイダルババ、わたしはあなたを故郷と思っていた」とある中で、私が「故郷」と訳した原語は、「ワタン」に相当するアゼルバイジャン語の「ヴァタン (vətən)」です。

< 第 112 篇 >

ヘイダルババ、わたしはあなたを故郷と思っていた
故郷を求めて、ためらうことなくやって来た
あなたの姿を目にして、涙を拭い去った
しかしあなたの裡にも痛ましい「異郷」があった
暗黒の牢獄、苦々しい水菓があなたの許にあった

027

シャフリヤールは「ヴァタン」という言葉を使うときに、基本的に「祖国」という概念について語っていません。シャフリヤールは「祖国」を語るときに、言い換えれば自らが現に帰属している国という意味については、イランが自分の祖国であるということに疑いや迷いはまったく持っていないと思われます。確かにシャフリヤールは、イランの中においてアゼルバイジャン人の権利というものを守りたいと思っている。その権利というのは何なのかといったときに、アゼルバイジャン人の固有文化であるところのアゼルバイジャン語を自分が守りたい、というのがシャフリヤールの一番の意向でありました。ただし、彼にはアゼルバイジャンという民族概念を

もって「祖国」をどうしようというつもりは別れない、ということになります。このシャフリヤールの考えと、アゼルバイジャン共和国の側でシャフリヤールを論ずるときとの概念の不同一が重要なポイントになってきます。シャフリヤールは「ヴァタン」のことを語るときには、故郷のホシュゲナーブ、そしてアゼルバイジャンのことを語っています。

郷里からは遠く、友らから引き離され、
心は病み、魂は悶える
人間のいないこの土地で
誰も友とするものはなく
ここでは貧しいものは皆、盗人か卑劣漢
富めるものは皆、収奪者
あまたの任侠気取りのお調子もの
盲と禿げばかりでは畑は枯れる^{※27}

028

これはさきほどお話ししました、彼が追われるようにテヘランからニーシャープールへの退去を余儀なくされたときのペルシア語詩「ニーシャープールにて」の出だしです。この文脈で詠んだ詩の冒頭でも、私が「郷里」と訳した原語は「ヴァタン」です。「ヴァタンから遠く離れて自分はこんな所に来ている」と、ホラーサーン州のニーシャープールでの心象風景を開陳して、ニーシャープールがいかに酷い所か、嫌な所か、「やっぱり緑のある世界に戻りたい……、一体何の罰で自分はこんな所にいるんだ」と詠んでいます。

そして繰り返しになりますが「ヘイダルババ、わたしはあなたを故郷と思っていた (Heydərbaba, səni vətən bilmişdim)」と、はっきりと故郷を「ヴァタン」と詠んでいます。

つまり彼の「ヴァタン」は、ホシュゲナーブのヘイダルババの麓の「故郷、郷里」でありまして、「ヘイダルババ」第二部に至って、その「ヴァタン」に戻ったときに、そこに痛ましい異郷を見たと詠んでいます。私がカギ括弧で「異郷」という訳語を使っていたのは、ペルシア語の「ゴル

バット (ghorbat)」がアゼルバイジャン語化した「ギュルバット (qürbat)」です。ペルシア語の詩的表現における「ゴルバット」については、『ワタン論集』の中で中村菜穂さんが精緻な分析をなさっています。^{※28}「ヘイダルババ」においては、「ヴァタン」に戻って来てみたら、自分自身が、また村で暮らしている人たちが、イラン社会の中で置き去りにされ、疎外された情けない状況下にあることを、「ギュルバット」の語で表現しています。その情けない状況というものを、シャフリヤールは「ヘイダルババ」の第二部でいろいろと詠んでいます。例えば第94篇では、1960年代になって久しぶりにホシュゲナーブに帰って来てみたときに、そこに自分の昔の先生だったモッラーは、すっかり老いに衰えてはいても存命だった。しかし、昔、級長だったミュセイイェブや、運動に長けていたマムドサン（ペルシア語でマフムドホセインという名のアゼルバイジャン語風に訛った発音です）が今どうしているのかと問うと、このように答えています。

君たち、マムドサンはどうしたのだ
あの子は若いのに死んでしまったそうだ
なぜ、なぜなのか、鼻から出血したからとでも言うのか？
風が吹く、見遣ればマムドサンはいない
この邑に血を止めるものはいない

029

これはどういう意味なのか、テヘランにいらっしゃる、イラン現代詩研究の第一人者で、かつて大阪大学で教鞭をとられたアーベディー先生にもメールでご意見を伺ってみました。するとこの「鼻から血が出て死ぬ」というのは、病に罹ることであり、この詩篇に詠まれているのはそういう出血を起こす人がいても、この村では治すことができない、医者なんかいない、ということを示しているということでした。

確かに脳卒中や脳出血を起こすと鼻から血が出ることがあるので、要はそういう病気で死んでしまった。これは医学生を経験したシャフリヤールならではの描写といえるのかもしれません。

それからミュセイイェブに何があったのか、と問えば

グラムが涙目に笑みを浮かべて答えた
あの子も、食うにもこと欠いて、死んでしまった

まだ若くして飢えて死んでしまう人がある、病気になってもそれを治す医者がいない、今そのような見放された状況に「ヴァタン」であるホシュゲナーブがあるということをシャフリヤールはこの中で詠っています。

子どもの頃にいた級友が若くて逝ってしまっていたそんな状況が、シャフリヤールが使った「ギェルバット」という言葉に表象されているのです。加えて、シャフリヤールは当時のイラン全体の状況を暗示するようなこともいくつか言っています。それは「人が人に対して狼みたいになっている」というような荒んだ風土を詠んだ詩句が第二部にある、とさきほど申し上げましたけれども、第 119 篇には、次のような詩句があります。

ヘイダルババ、不満はいったい何を生むだろう
忍耐と辛抱こそが、虐待の家を打ち毀す

030

イランのアゼルバイジャン語詩人キャリーム・マシュルーテチー・ソンマズが、^{※29}「ヘイダルババ」にアゼルバイジャン語原文とペルシア語訳、それにきわめて詳細なペルシア語による注解を付けた版があります。それによると、「虐待の家」とここで触れているのは、当時の悪名高いシャーの秘密警察サーヴァークが^{※30}日を追うごとにより抑圧的に、より残忍になってゆく状況下にスーフィー的な忍耐を呼びかけているのだと説明しています。

子らは互いに意を決している
この冬はまた春になるだろう

第 119 篇から第 120 篇への脈絡で、残忍で暴力的な圧政が続く中、いつかそれが何か良い状況に変わるだろう、忍耐に何かの希望を持とうという姿勢がみえてきます。こちら辺から、イランの詩人、そしてアゼルバイ

ジャン語詩人としてのシャフリヤールの時代の胎動を前にしたスタンスそのものの問題がみえてくるかと思います。実はそれが、最初に皆さんのお目につけた、ハーメネイーほかの指導者の名前まで挙げて、革命を褒め称える詩を書いたこととの関係も考える必要が生ずるかと思います。

4-3. 「時の声」 イラン革命への予言的詩篇？

そこで彼がアゼルバイジャン語で書いた「時の声 (Zaman Səsi)」という一篇をご覧いただきたいと思います (124 頁参照)。これが書かれた時期は 1976 年です。1978 年にイラン革命が起きますので、イラン革命とかなり近い時期に書かれた詩です。

朝が来た——あらゆる方角から湧き上がるアザーンの声

と始まって、この詩は全篇をアゼルバイジャン語の「声 (səs)」という言葉を繰り返すように作られています。それでアザーンの声とか、お母さんの声、というような静謐感のある、あるいは優しいイメージを繰り返しながら、時代と世情に対して次第に声量と力を増す怒りの声へと変わってきます。

031

いま耳に鳴り響く若い声
時は力士のように、ぼくを地に投げ倒した
ぼくの詩、ぼくの書くものは、くずおれる勇士の声
しばし耳を傾けよ、世の終わりのとき——天を震撼させる
諸々の国民の叫び、助けを呼ぶ、訴える声
人は秋にのぞむ——落ち葉のようにこぼれてゆく命
こぼれてゆく落ち葉に慟哭する秋の声——サズ※31の音のように
ぼくは四十年囚われの身　やつれ果てたあの潤いある声
味気なくとも、ぼくの声を受けてくれ
ぼくも声をあげれば、口を衝くのは容赦ない言葉

怒る人々、湧き上がる容赦ない言葉

さらには、ここに録音となって未来へ残る時代の声、そして「革命」を率いる英雄的な声というイメージが重なります。

録音テープを満たそう、どうか残って欲しい——いつの日かこの子らが
歓喜の裡にぼくらが残した声を讃えるように
声に磁石があれば惹きつける——革命をしかと眼にとどめよ
自由を勝ち得た「わがサルダル」の勇猛な声^{※32}

この「テープに残る声」という表現にイラン革命を重ね合わせると、革命が近づくにつれて、街頭で勢いを増していった反政府デモの中で人々が唱和した革命スローガンをつい思い浮かべがちです。シャフリヤールがこの時点でイランの中の革命の胎動というものを予言的に詩に詠んだようにも見えますが、しかし1976年から77年頃という作詩年代を考えると、イラン自身が今から起きることが「革命」だという方向性や認識があったか、歴史研究の知見を十分に持たない私が断定的に申すには躊躇があります。

八尾師誠先生がおっしゃっている通り、イランの革命というのは、1978年時点でも、まだあれほどの大転換をもたらす革命は（少なくともイランを外側から見るという意味では……）予見できなかったと考えると、私はこの点は保留したいと思います。^{※33}

またここで「革命をしかと眼にとどめよ」という言葉は、「わがサルダル」の勇猛な声」とあることから、直接的には今日のお話の最初に紹介した、タブリーズ包囲に対抗して抵抗運動を指揮した「国民将軍（サルダーレ・メッリー）」ことサッタール・ハーンのことです。つまりここにある明確な「革命」という言葉は、一義的には立憲革命の際のサッタール・ハーンの歴史的活躍の記憶を想起するものと限定的に解釈すべきかもしれません。

しかし、むしろここで大事な点は、彼が、自分が「40年にわたって囚われの身である」と書いているところです。1976年か77年から40年遡

るということは、シャフリヤールがテヘランから何かの問題で（たぶん恋愛問題だったというあのエピソードが本当なのかどうかはともかくとして、何らかの理由で）放逐されて辛酸をなめた時期に遡ります。1934年には父の死の折にも故郷タブリーズへの帰還を阻まれています。イラン革命という具体的な政治的事象を予見したか否かはともかく、シャフリヤールがイランの当時の体制の下、自らが不当な迫害を長らく忍んできたという意識と、今も申した徳目としての「忍耐」の下に、受動的にであっても、社会の変革を希求し続けるという心性があったことに注目しておくべきかと思います。

4-4. 社会に対する批判的な眼差し

現在、シャフリヤールは、特に「現体制との葛藤や軋轢がない」という意味において、政治的に当たり障りが無い、あるいはどちらかといえばノンポリ的な叙情詩人と目されがちと私は理解します。しかし、この「時の声」や「ヘイダルババ」第二部の個々の詩篇をみても、案外シャフリヤールは、シャーの時代の同時代性、共時態の中では、社会に向けた批判的な言葉をいろいろと詠んでいることに気づかされます。

033

その意味では、例えばシャフリヤールのアゼルバイジャン語詩に「人とジン (İns və Cin)」という作品があり、ここでは次のように信心深さを装った欺瞞を批判しています。

シャイターンが捧げる^{ドゥアー}祈祷のすべてにアーメンと

世界は応える

ドゥアーは気高い　けれど我らをこのアーメンから救い給え

(.....)

憐れみ給え、憎しみに満ちたシャイターンの手から我らを救い給え

シャイターンをこそこの憎しみから救い給え

人々を殺め、追善のハトムを行い、ヤースィンの章を読む

いと高き神よ、この欺瞞とヤースィンから人々を救い給え

なおこの一篇でも、彼はまた自らを「何年も囚われの身」だと詠んでいます。

わたしは鶏のように、鳥小屋に何年も囚われた身
鶏を送り給え、幽閉からわたしを救わ^{※34}んがため

また、おそらくシャフリヤールらしからぬとも思えるほど直截な政治批判と思われるのが、イラン歴 1333 年（西暦 1954 年から 55 年）にタブリーズへの帰還を果たし、また『ヘイダルババ』の第一部を刊行した折につくったペルシア語の自由韻律詩「ミイラになった男（Mūmiyā'i）」という一篇です。シャフリヤールの自由韻律詩というのは数が少なく、さらに本作は詩の本篇に加えて自ら散文で説明的な序文を付しているという特徴的な作りになっています。作品のコンセプトは、ずっと離れていた故郷タブリーズへ戻ってみると、何一つ昔を思い出す縁がない疎外感を覚える自分を、古代の墓から蘇生したミイラに擬えるものです。

そこにはこのようなくだりがあります。

大空はいつも愚か者の肩に
玩具をいっぱい詰めた古い袋を掛ける
またひとり、愚か者は重い荷を背負い
ぼくを笑わせる
かつてぼくの肩にのしかかった重荷のようだ
背中^{※35}は傷つき、のたうって墓へ向かう驢馬のようだ
その運命にぼくは泣き笑います

そして今申し上げた、詩人自身の「序文」に、これに呼応すると思われる次のような言葉があります。

そのとき老いた「時」の舞台監督が、玩具がいっぱいに詰まった古い革袋を肩に担いで、笑顔で媚びながら、一群の人々の前にそれを空

けてゆく。革袋はファラング(ヨーロッパ)の街の色とりどりの物語だ。女、権力、黄金、地位、まやかしのあらゆる希望、そして君の望むすべてが袋のなかにある。誰もがこの誑かしに眼を惹かれ、幻惑されて、我を見失うあまり、自らの運命と、なすべきことに考えが及ばなくなってしまうようだ。

この物語は翌日も現れる。けれど今日の友は昨日のままではない。激越な怒り、憤怒、砲弾、非難を浴びて誑かしを引き纏め、袋に注ぎ込むと再び肩に担いで去ってゆく。そして他の人々を前にまた同じまやかしを演じ、口をぽかんと開けて悲しい眼差しをした哀れな人々は彼を見送る。戻ってきて、彼は冷淡に言う。「行け、そして死ね」と。

当惑して開いた口は怒ることもなく、時の革命の激流が止むと、窒息しそうな自らの悪夢のなかで、暗い墓穴へと、そして其処から自ら^{※36}が整えた暗黒の運命に向かって、旅立ってゆく。

この詩は詩篇自体の解釈の難しさに加え、あたかも別作品のような散文の「序文」が併存する構成になっていることで、理解の難しい作品です。そのため、今は本作については未定稿を前提のお話ししかできません。それでもこの作品には外国勢力のイランとの関係への批判的な視線が直接的に見えろと言って外れてはいないと思います。またこの1954年というのは、モサッデグ政権が米英の工作によるクーデターで瓦解した翌年という時代性をみることも可能でしょう。モサッデグ政権崩壊は、そこからイラン革命にも繋がる長い長い1960年代から70年代に、フランス国立東洋言語文化学院(INALCO)教授であったクリストフ・バライ氏の言葉を借りれば「偉大な過去の意識と共に、“CIA”に管理された新アケメネス主義的ドクトリンで動くシャーの下に息の詰まる」時代の入口であり、また正当な手続きでイラン人自身が選んだ政権が外国の利害によって潰されたという意味で、イラン人のプライドを大きく傷つける事件でもありました。

その意味では、シャフリヤールにとって「祖国」という意味の「ワタン/ヴァタン」がイランに他ならないということが、ここに見えてくるとも言えるかもしれません。

5. 「サハンドよ」アゼルバイジャン語詩人としての立脚点

ここで、サハンドがシャフリヤールに寄せた書簡と、それに対する答礼としての長編詩「サハンドよ」に移りたいと思います（114頁参照）。

はじめに申し上げたとおり、当時のイランにあってあからさまな親ソヴィエト民族主義詩人であったサハンドの書簡、あるいは当時のソヴィエト側の知識人から受ける書簡というのはどうしてもシャフリヤールに対して、民族主義的な立ち位置からの政治的コミットメントを期待する働きかけになっています。それは端的に言えば、イランにおいてアゼルバイジャン系国民が不当な迫害にさらされているという認識があって、それに何らかの政治的解決を必要とするという意味です。

その背景として、少なくとも当時のソヴィエト・アゼルバイジャンにあって、アラス河以南でタブリーズに代表されるイラン領アゼルバイジャンは、統一されるべき「ひとつの祖国」であると信じる人々には、アゼルバイジャン自治政府へのイランのシャーの態度は「ドイツ・ファシズムの残虐行為にも比すべき蛮行」と受け止められていました。実際にそのひとつの思想的な帰結として生まれるのが、あとでお話しするバフティヤル・ヴァハブザーダの「ギュリュスタン」です。そのためアゼルバイジャン危機以後のサハンドや、ソヴィエト・アゼルバイジャンの知識人からの働きかけというのはややもすると、イランにあって政治的に過激な分離独立主義への思想的賛同に言質をとられるという可能性がありました。

こうした誘因に対して、シャフリヤールはある種の肩透かしを食わせています。「肩透かし」というのは、シャフリヤールは相手の言うことを否定してかからずに、自分に呼びかけのあった民族主義的で政治的な言論や暗喩をまず否定しません。そして時に攻撃的でさえあるような相手の言論を受け止めて、ある程度盛り上げています。しかし、それは「サハンドよ」の終盤でみられるように、民族的同胞としての南北アゼルバイジャン人の連帯と闘争の高らかな称揚を言葉にするようにみえても、最後には自分からそこに距離を置いて終わっているように思います。

彼のスタンスを整理すると次のようになります。第一には、アラス河南

北にまたがって、つまり当時のソヴィエト・アゼルバイジャンにまたがって、同一言語を共有する「アゼルバイジャン人」が同胞関係にあるということへの共感¹は確実に持っていたということ。第二の点においては、特に言語に代表される、アゼルバイジャンの文化的独自性をイランの中において認めるべきという意識も彼は持っていた。ただし第三として、彼は国民国家的な視点においてイランからアゼルバイジャンを独立させる、あるいは南北が領域国民国家として統一されるべきという考えには与しない。それは彼自身が「祖国」という意味のワタンはイランであることに疑義をもっておらず、彼にとっての「アゼルバイジャンというワタン」はイランの中の「郷里、故郷」としてのタブリーズ、そしてヘイダルババの麓のホシュゲナーブであるという論理構成になると思います。

その結果としてシャフリヤールのアゼルバイジャン語詩人としての立ち位置は、イランにおいて、アゼルバイジャン語という言語を、文学的な言語としてその可能性を立証することでした。つまり文学的な言語としてのアゼルバイジャン語の創造性の証を立てることがシャフリヤールのやろうとしていることだということです。だからそれ以上の政治的なことにコミットする姿勢はない。常に「退いた」姿勢を保っていると言ってよいと思います。

と同時に、イラン社会の批判であれ、あるいはアゼルバイジャン人の文化的独自性の訴えであれ、こうした社会、政治的な問題に向き合うシャフリヤールの具体的な姿勢には、既に挙げたとおり「忍耐」あるいは「待つこと」が重要なキーワードになると思います。それは「ヘイダルババ」にも共通します。また、さきほど少し触れたペルシア語自由韻律詩の「ミイラになった男」も最後の最後は、神の審判に正義の実現を待ち望み、「ミイラ」は再び墓へと戻っていきます。その締めくくりをここに引用してみます。

再びぼくは墓へ戻ろう
恐ろしい、御稜威^{みいつ}の洞窟をぼくは拓く
ぼくの肩は狭隘と暗黒に圧迫されている

小さな星が端々で瞬いている
一縷の愛と希望だ
幾多の眼がぼくを凝視している
鰐の唸る声が聞こえる
ファラオの不遜かサーメリー^{※39}の妖術だ
ぼくにはムーサーとモハンマドの手がともにある
ぼくらは往こう
昼と夜が融和するあの場所でまた会おう
朝はそれほど遠くない
おやすみなさい^{※40}

そんなシャフリヤールは、革命が成就すると、本日の最初にお目にかけたような詩を詠むようになります。「結果」としての革命の実現過程には、そしてその後の変容も含め、具体的にどれだけの命が失われ、血が流れたかという事実の凄惨さと重さがあるのは言うまでもないことです。現在の

038

イラン人の目線でみると、シャフリヤールの全面的に体制の論理に沿った平板な高揚感を詠んだ事実、無節操、あるいはオポチュニスト的な「いかがわしさ」を見る人がいても不思議はないと思います。

シャフリヤールの革命礼賛詩の成り立ちにはイラン革命後の指導層の「政治利用」がある、つまり、これはシャフリヤールの本心ではない、と割り切ってみる向きもあります。シャフリヤールに強く働きかけて革命を称える詩を書かせた指導者にはホメイニー^{※41}その人と、ラフサンジャニー^{※42}、ハーメネイーという巨頭も含まれていたそうです。

しかし自分を「40年間囚われの身だった」と言わしめたもの、つまり「祖国」としてのイランに対して抱いた怒りや失望とか、あるいは（特にアゼルバイジャン危機を経験して）イランの中で言語使用の自由に代表されるアゼルバイジャン系国民の独自文化への抑圧感を覚える状態があって、イラン革命がシャフリヤールの経験した息苦しさにより一定の解決をもたらしたことは、おそらく事実であったのだろうと私は思います。だからあのような詩を革命後に書いていた事情には、あながちオポチュニストとしての振

る舞いだけではなかったのではないのでしょうか。それだけ、若い日々からパフラヴィー朝の王政下に抱えた個人的な、あるいはマイノリティーとしての集団的な被虐感、「ギュルバット」となったヴァタン／郷里への悲しみと怒り、政治への批判といった多くを秘めた「忍耐の人」が堆積させたものの重さがただのものではなかった、という見方もできるのです。

6. 「祖国」としてのアゼルバイジャン ——アゼルバイジャン共和国の視点から

アゼルバイジャン共和国に話を移しますと、シャフリヤールという人物をアゼルバイジャン共和国の側は、どうしても民族主義者、そして南北アゼルバイジャンの統一を夢見ていた詩人だというふうに位置づけたいという願望のようなものがはっきり読みとれます。これは別にシャフリヤールに限ったことではなくて、さきほど名前を出したサッタール・ハーンであるとかピーシェヴァリーというような人たちも、アゼルバイジャン共和国のナショナリズムという文脈の中で（イランの政治的、歴史的な文脈とは別に）、みな、アゼルバイジャンの独立と統一のために戦った人たちであるという認識が往々にして語られます。それを非常によく体現しているのが、アゼルバイジャン編の資料の中にある、バフティヤル・ヴァハブザーダ（Bəxtiyar Vahabzadə 1925-2009）の「ギュリュスタン（Gülüstən）」という詩です（128 頁参照）。

なおアゼルバイジャン語表記の地名・国号 Azərbaycan（トルコ共和国の言語学者はしばしば Azərbaycan と表記）のアゼルバイジャン共和国での実際の発音は、どちらかといえば「アザルバイジャン」に聞こえるので、「ギュリュスタン」の訳稿も ə の文字を /a/ として、このようにカナ表記しています。

この詩でヴァハブザーダは、シャフリヤールも自らの歴史観、世界観に共鳴していることを前提にして、「ヘイダルババ」からの 5 行詩 2 篇を原文のまま「ギュリュスタン」の作中に切り取っています。この点については、『中東現代文学リブレット① トルコ文学越境』で、また「ギュリュス

タン」の翻訳資料で触れているとおりです。

題名のギュリュスタンは、1813年に当時の帝政ロシアとカージャール朝ペルシアの間のイラン・ロシア戦争の結果として、アラス川に国境が設定されたときのゴレスターン条約のことです。そのゴレスターン条約の締結地のアゼルバイジャン語読みがギュリュスタンで、条約調印の空想上の場面を描きながら、アゼルバイジャンという「ひとつの祖国」が二つに割かれてしまったことへの怒りと嘆きを詠んでいます。つまり文学的表現ではありますが、タブリーズとバクーは共に、領域国民国家としてのアゼルバイジャンであり、ゴレスターン条約とはそれを二つに割く歴史／外交上の「事件」とであるという認識を明確な言葉にしたのでした。

私個人の「見聞」あるいは「雑談」を「セオリー」へ転化するだけの社会的な方法論に私はまったく心得がありませんので、断言することは避けませんが、アゼルバイジャン共和国に行くと（特にイランとの国境に接するナフチュヴァン自治共和国で顕著ですが）、タブリーズは「イランの占領下におかれている」という認識を、怒気を顕わに語る人に出遭うことに驚きます。私自身はゴレスターン条約とは、「帝国」としてのイランがロシアとの敗戦によって、アラス以北のコーカサス領を「失った」という認識でいたのですが、アゼルバイジャン人にとってのゴレスターン条約とは、タブリーズを中心とする「南アゼルバイジャン」のイランによる占領を確定したものと思っている、あるいはそのように学校教育などの場で教えられている様子が窺えます。

私はこの作品の文学性をそんなに認めるつもりはないのですけれども、ただこの作品はアゼルバイジャン・ナショナリズムを具体的な言語イメージに凝集させた史料としては面白い、あるいは興味深い作品だと思っているので、これを一通り全部訳しました。

この詩は、さきほど申し上げたとおり、ゴレスターン条約という一つの外交上、歴史上の事件を、国家分断の事実であると断定的に位置付けてしまいました。すると、ちょうど東西冷戦に突入する時期にあった当時のソヴィエト政権としては、アゼルバイジャン危機以降、「イラン領アゼルバイジャンは等しくアゼルバイジャンである。一つの国である」という言説

は封印する傾向にあった。ひとたびそれを政治的な公式見解にしてしまったら、その帰結としてイランに対して介入しなければいけなくなってくる。しかし、冷戦体制の中で世界における戦略的な軍事力の配分を考えたときに、当時のソヴィエトはそこまではやりたくないという意思があり、そういう言説は封印していたわけです。他方でソヴィエト・アゼルバイジャン側では、既に申したとおりアゼルバイジャン危機の際に「民族的同胞を虐待」したイラン政府への義憤が収まらない状況でした。そのときにこういう詩を平然と書いてしまったということで、この詩は1959年のソヴィエトで政治問題化します。

ヴァハブザーダは、以後しばらく政治的な迫害にさらされることになります。また少し遡れば、スターリンの大粛清時代のアゼルバイジャンでは、汎トルコ主義者、ナショナリストの烙印を押された夥しい人々が処刑、投獄や追放に遭っている生々しい記憶の残る時代でした。これがスターリン時代であれば彼も粛清対象となる蓋然性は高かったでしょう。そのときに、意外な人物が彼をのっぴきならぬ状況から救ったらしいのです。さきにサハンドとの関係で名前を出した、ヘイダル・アリエフを思い出していただきたいと思います。今、アゼルバイジャン共和国では、この「ギュリュスタン」で迫害対象になったヴァハブザーダを、政治犯罪者としての糾弾、訴追から救ったのが、誰だろうヘイダル・アリエフであったと、まことしやかに語られています。ヘイダル・アリエフは1950年代にバクーのKGBから頭角を現した人物だったので、彼が介入してヴァハブザーダを救ったというものです。無論これは、当時のKGBのアーカイブか何かの文書的な証拠を確認してウラが取れない限り、軽々しく肯定していい話ではないと思います。

例えば、廣瀬陽子先生監修の『アゼルバイジャンを知るための67章』^{※43}にもあるとおり、今のアゼルバイジャン共和国はヘイダル・アリエフを、トルコにおけるアタテュルクのように、いわゆる国父化するような動きがあり、何でも作為的に「ヘイダル・アリエフの功績」を語りたがる傾向があるとも理解します。ですから、あのとき、ヴァハブザーダを救ったのはアリエフである、というような話を鵜呑みにするわけにいかないのは確か

です。

しかし、さきほど触れたとおり、イラン・アゼルバイジャンの民族主義詩人で、親ソヴィエトの政治的左派と思われるサハンドが、ヘイダル・アリエフという当時のソヴィエト共産党の政治エリートに寄せる韻文書簡が残されているという興味深い事実があります。これは文学的事象を超えて、イラン・ソヴィエト関係史的な政治エピソードであるとまで言えば過大評価になるのか、私も定めがたいとは思っています。しかし、少なくともヘイダル・アリエフという政治的人物の周辺に、ヴァハブザーダやサハンドといった「ワタン／祖国」の文学者たちの名前を繋ぐ線が見えるということは、テヘラン、バクー、そしてモスクワの繋がりを文学的、文学史的な視点から見ると可能性もありそうで興味深いとは申せるでしょう。終わりはまとまりのない話になって恐縮ですが、ちょっとこれは面白い話というくらいに、眉に唾をつけて聞いておけばよいのかなと申して、ここで発表を終わらせていただきます。

第二部 質疑応答

岡 「ヘイダルババ」はイランでも人気を博しているのですか。

石井 イランではベルシア語訳が複数存在して、「ベルシア語詩人シャフリヤールの作品」として読まれていますので、愛読はされています。ただ、特に「人気を博した」という意味では、アーザリー人の、つまりイランのアゼルバイジャン系の住民とそれからアゼルバイジャン共和国のアゼルバイジャン人の間に、多大な喝采を博したということです。例のアゼルバイジャン危機以後、アゼルバイジャン系のイラン人にとっては、息苦しい状態になってしまったという状況の中で、シャフリヤールが初めてアゼルバイジャン語でこれだけの作品を刊行したということが、アゼルバイジャン語現代文学史的にエポックメイキングな事件だったんですね。

044 岡 シャフリヤールにとってのワタンが、ヘイダルババをはじめとする故郷ということが、今日のお話でよく分かりました。他方、「祖国」という意味では、シャフリヤールにおいては「領域国民国家としてのイラン以上に自分の国民的帰属への疑問はない」。つまり、アゼルバイジャン共和国の側は、シャフリヤールの祖国としてのワタンはアゼルバイジャン共和国だという形で位置づけようとしているのに対して、いやそうではない、イランが自分の「祖国」である、ということですね。この場合、シャフリヤールの詩の中で、「祖国」とはどのような言葉で表されているのでしょうか。彼は、自分が国民として帰属する国はイランだと考えているわけですが、「国民として自分の帰属している国」というのは「祖国」と同義だ、と言ってしまっているのでしょうか。例えば、スィーミン・ベフバハーニーの詩「再び君を造ろう、祖国よ」の場合、「祖国／ワタン」というのは、イランという国民国家を指している訳ですが、果たして、シャフリヤールはイランを「ワタン」と呼ぶのか、呼ばないとすれば、日本語として、それを「祖国」と言ってしまっているのかという疑問を持ちました。

石井 はい、シャフリヤールはペルシア語の詩の中で、どのくらいワタンのことを語っているか。祖国としてのイランというのをペルシア語の詩の中で彼がどのくらい語っているのか、少なくともアゼルバイジャン語詩と同じには全体を俯瞰してはおりません。しかしちょっと「逆ばり」的に、シャフリヤールには少々珍しい風刺詩的な、それゆえにやや「イロモノ」的な一篇に注目してみます。これは「テヘランとテヘラン者 (Tehrān va tehrānī)」というペルシア語の詩です。日本的な感覚で言うなら、関西人が「東京もんがなんぼのもんや」と毒づくような感じの詩で、イラン人は、首都テヘランとテヘラン人のせいでどれだけの災いを被ったことか、どれだけ迷惑しているか、というような感覚の詩です。

おい、君、愚かな病人めが、なんという戯言^{たわごと}と出鱈目を言うんだ
ラシュト人は「魚の頭を喰らう」、トゥース人は「驢馬の頭」と言い
ゴム人をこきおろし、エスファハーン人にはさらに悪しざまな
言い種

アーザルバーイジャンの若者は「マスケのトルコ人」だと
君は皆に火だるまにされたが、君はその火に油を注いだね
テヘラン者め、公正な裁定が降りるぞ——バカは君か、
それとも俺か

045

正直に申すとこの詩は、私自身がまだ理解しきれていない行が何箇所もあって、全部自信をもって訳出できていません。その意味で本日は未定稿扱いで、資料にも入れておりません。

阿片窟のこの片隅とモツ煮込み屋で
悪酔い、素寒貧、任侠道のほかに何を得たかね
「おフランスの学校」が君にくれるのは、せいぜい風呂屋で釜^{リサンス}を
焚く免状さ
君はブーアリー・スィーナールにもブーナスル・ファーラービーにも
なれやしない

こんな調子で毒づいて、悪態をつく詩なのですが、そういう中でも

シャフリヤールが一つ、ちょっと面白いことを書いているのは、

敵は民族の礎を転覆しようと
まずは人々を互いに動揺させ、引き離そうとする
それぞれを孤立させ、ひとつひとつを蝕んでゆく
こうして足許をすくい、頭を擡^{もた}げる
君は敵の欺瞞^{※44}と企みをわからなかった

こういう言葉を書いている、これは決してイランに対してアゼルバイジャンの民族独立的な発想とか、イランが「祖国」としての「ワタン」であることを否定するような言論ではありません。むしろイランにおける「民族的な礎 (bonyād-e qovmī)」という概念が示されています。「イラン人」はテヘランとテヘラン者の手からどれだけの災いを被ったかというリージョナルな、あるいはローカルなものから見た「反首都」のような言い方になっているので、言葉としてのワタンが出てくるかどうかは別として、シャフリヤールという人は、イランは自分の帰属の地であることを前提にはしていると考えます。こういう「イロモノ系」と映るような風刺詩の中で、ラシュト人とか、トゥース人とか、エスファハーン人とか、そういう人たちが「テヘラン」に見下されることに対して抱く反感や怨嗟の感情を代弁する言葉、あるいはテヘランの西洋かぶれの鼻持ちならなさを風刺するような言葉を書いても、決して「イラン」の一体性を否定することは言いません。この詩は遠心的かもしれませんが、分離主義的ではありません。ただ、こと「アゼルバイジャンの若者はマスケのトルコ人だと！」という詩句を彼が詠むときには（この詩の中でエスファハーン、ラシュト、トゥースなどと位相が異なって）、確実に「エスニシティ」が対立軸を構成しているとは思います。

ラシュトというのはカスピ海地方にあるギーラーン州の街です。大体どこの国でも、特定の地方を狙い撃ちに、ステレオタイプ化して悪意的な笑いをとるというジョークは多かれ少なかれあります。イランでも、例えばエスファハーン人はケチであるといった感じです。何故か理由は分からないのですが、ラシュトというのは「馬鹿な奴」と類型化されてネタに使われることがままあります。ラシュト人は「魚の

頭を食らう」というのは、インターネットでヒットがあったことによれば、ラシュト人がよそに魚を売りに出かけるとき、「魚は頭から腐るから」と頭だけ切り落として氷に入れて売りに行ったけれど、肝心の身の方を腐らせてしまいましたとさ、という小噺があるようです。^{※45}

イラン全体の中でも地方に対して、首都と地方という感じでこれは書いているわけです。そういう中でアゼルバイジャンも入れていると。その意味でいくと、シャフリヤールは国としての一体性とか国民統合というものを否定する言論は言っていない。ただし、彼は民族的にアラス川を越えた北と南には兄弟関係であるということをきわめて意識している。その意味ではシンパシーははっきりしている。それと、アゼルバイジャン人がイランの中で言語の自由を奪われているということに対してはものすごいセンシティブです。そのことに対しては自分たちの「権利主張」はちゃんとしたいという想いはありました。ただし、彼は政治闘争に加わって何かやろうというような気はさらさらなくて、まして分離独立的な動きというものにコミットする気はない。彼自身の分限というか立ち位置というのは、アゼルバイジャン語という言語の文学言語としての可能性、創造性をちゃんともっていることを立証することである、ということに尽きるということです。

047

岡 ナショナルなアイデンティティとしてはイラン人であるのですね。

石井 はい。逆に彼は一義的にはペルシア語詩人として不動の地位を築いていたわけで、「我らの世紀のハーフェズ」と言われるくらい、ペルシア語のガザル（定型抒情詩）でとても美しい詩を数多く作っています。ペルシア語詩人としてのアイデンティティははっきりしているわけなので、そこはソヴィエト時代から独立後を通じてアゼルバイジャン共和国側、つまり「北」の人が、願望として自分たちのナショナリストの方に取り込みたがるけれども、それは違うと思います。

ただ、シャフリヤールの作品には「南北統一論」にスレスレの過激な民族主義的言論が見えることはあります。しかし、それはサハンドのような人、あるいはソヴィエト側の人とのインタラクティブな文脈で相手の言っていることを否定せず、詩的素材として展開させるけれど、自身でそれにコミットするところまではいかない。それはおそら

くパフラヴィー朝時代に、文学者として自分を守るため、自己防衛というのはもちろんあったのだと思います。

中村 おそらく「ヴァタン」という言葉の受け取り方、あるいは解釈が重要になるかと思います。以前、イラン立憲革命期の詩人でアーレフ・ガズヴィーニーという人を紹介させていただきました。アーレフは自ら詩作をして楽器を弾いて歌った詩人で、今で言うところのシンガー・ソングライターなのですが、「祖国愛（エシュゲ・ヴァタン）」について多くの詩を詠んでいます。彼がヴァタンについて語った次のような言葉があります。「私が祖国愛のタスニーフ（歌）を作った頃、イラン人は一万人のうち一人も、祖国とは何かを知らなかった。彼らは、ヴァタンとは、単に人の生まれた町や村のことだと思っていたのだ」と。要するに、彼が祖国の意味でヴァタン（イラン）を詠ったことで、国民国家としてのヴァタン、つまり祖国というものを人々が理解するようになった、と。そのような言葉を思い出しながら、シャフリヤールの詩の中に出てきた「ヘイダルババ、わたしはあなたを故郷（ヴァタン）と思っていた」というときのヴァタンを考えてみますと、やはり自分の「故郷」という意味で使っていたのだらうと思います。立憲革命期には国民国家としてのイランが確立していったわけですが、その中で育ったシャフリヤールがイランの体制をどう捉えていたのか、とても興味深いところです。国民国家としての枠組みを肯定しつつ、またペルシア語詩人として活躍しながら、他方で彼自身の母語のアゼリ語や故郷への愛着はやはり他に替えがたいものだったろうと想像しています。

それから、ヘイダルババの第119篇で「忍耐と辛抱こそが、虐待の家を打ち毀す」という表現が出てきました。ペルシア語の表現の中にも「～の家を壊す」という表現があり、「～を滅ぼす」という代わりに「～の家を壊す」と表現することがあります。そのように読めるとすると、虐待そのものを滅ぼすんだ、と言っているのかもしれませんが、そうだとすると、サーヴァークという解釈も成り立ちますが、サーヴァークに限定する必要はないのではないか、と思いますが、いかがでしょうか。

石井 つまり圧政と一般的に捉えることができるということですね。

中村 はい、一般的な圧制として捉えることが可能かと思いました。むしろ表立った闘争に向かうのではなく「忍耐と辛抱」こそが圧制を減ぼすのだと言っている点はシャフリヤールらしいと思います。

石井 はい、「忍耐によって虐待を打ち壊す」という発想はシャフリヤールらしいと思います。先程申し上げたように、イランの内政に関わることであれ、アゼルバイジャンの社会的な位置に関わるものであれ、自分から政治的なアクションにコミットする気はないというのがはっきりしていて、何かこう「待ち」の姿勢で我慢しようというのが強いと私は思っています。だから革命が成就した後で直截に革命を手放しで礼賛するような詩を書いたところに唐突感を覚えます。

中村 もう一つ、「時の声」という詩について。詠まれたのが1977年であれば、イランの詩人や作家たちの間では反体制運動がかなり活発になっていた時期かと思います。1977年10月に「十夜（ダフ・シャブ）」と呼ばれたポエトリー・リーディングの集会在テヘランのゲーテ・インスティトゥートで開かれ、非政府系組織であるイラン作家協会がこれに関わっていました。現代詩が非常に政治的に先鋭化していった時代ですので、シャフリヤールの詩もそうした流れと関わっていたのではないかと思いました。

049

石井 ペルシア語の表現との関係性ということについて貴重なコメントをありがとうございます。シャフリヤールのアゼルバイジャン語というのは、ペルシア語の影響は排除できません。例えばペルシア語の複合動詞を使った独特の表現がそのまま、例えばペルシア語のキャルダンで構成する複合動詞が、アトマクという動詞に置き換えられて、そのままアゼルバイジャン語として使われているとおぼしき表現は、シャフリヤールに時にみかけます。アゼルバイジャン語のネイティブだとは言っても、ペルシア語の影響はどうしても排除できていません。また、当然彼はまさしく詩を書く者として、ペルシア語詩に精通していましたから、ペルシア語詩の表現を踏まえた解釈が成立することはあ

り得ると思います。ご意見をいただいた点については、ペルシア語詩での具体的な表現や語法も視野にいれて、それがアゼルバイジャン語の統語法や詩的表現の中に解釈として成り立つか考えてみる必要を感じました。

それと「時の声」の書かれた時期が西暦 1977 年であれば、そろそろ革命の胎動も見えた頃であろうとのご指摘ですね。この作品の作詩年のイスラーム太陽暦 1355 年が 1976 年から 1977 年に被さるので微妙な時期に思えます。内容的にはイラン革命を「暗示」というより「確言」あるいは「確信」する作品とさえ読めると感じます。作詩年が仮に 1978 年であれば、街頭デモで集団的な「声」にどんどんクレッシェンドがかかった時期をリアルに描いたと解釈して正解であろうと思います。ただ 1977 年頃に革命に向かう「声」がそこまで大々的な結集をみた時期であるか、私自身が断定的に申せないので、保留をお許し願いたいと思います。

岡崎 半年くらい前に別の研究会で、アゼルバイジャンに関する発表があつて、アゼルバイジャンのムスリム知識人の話を伺う機会がありました。例えば私の専門領域であるアラブの 19 世紀末の思想に関わるのですが、カワーキビーという思想家が、世界のムスリム知識人をメッカに集めて円卓会議を主催するという架空の物語（『諸都市の母（'Umm al-Qurā）』、1900 年）を創作しました。その物語において宗教的逸脱を戒めるという議論の中で、タブリーズ出身の論客がかなり重要な役割を担っていました。要するに、イラン、トルコ、アラブ諸地域からすると、アゼルバイジャンは他の文化圏と接触するムスリム文化圏の最前線とみなされているのです。その西側はアルメニア、北側はロシア、東側はペルシアと接することから、それらの影響力を被っていることが分かります。ですからアゼルバイジャンの作家がペルシアのアイデンティティを示すことは必然であることに加え、ムスリムが人口的に多数派であることから「アザーンの声が」という一節も必然的に生まれてくるのかと思います。アゼルバイジャン人として言語的にナショナリズムを示すことに加えて、宗教アイデンティティみたいなものも詩句の中で表現しているのではないのでしょうか。そういう印象を受けました。あともう一つ、「シャーム（歴史的シリア）の破壊」

という一節がありましたが、それは何を意味しているのでしょうか。

石井 ムスリムとしての宗教的アイデンティティ、あるいはシャフリヤールの宗教性に関して言えば、さっき私の話の中でもありましたように、シャイターンというモチーフをよく使ったり、一部の詩でジンとシャイターンを峻別してジンは人に善をなす存在という独特な宗教的世界観が仄見えたりで、彼は基本的に宗教的な人だったと思います。確かに彼の作品にはいろいろと昔の恋人をめぐっての官能的なイメージも多少入り込む部分もあると思うんですけども、ただ基本的に宗教的倫理感はバックボーンにかなり強く出ている詩人であると思われるので、その意味でいっても、彼はイスラーム革命というものには、どちらかと言えば、思想的には支持に回っていた部分があったのだろかなと思います。

「シリア」について申せば「ヘイダルババ」第一部第50篇に現れる「シャムの廃墟」のことですね。この詩篇はたとえばオマル・ハイヤームのルバーイヤートにみるような、究極的に死を免れない、人間の有限性や無常といった主題を詠んだものと言えます。その文脈での「シリアの廃墟」というのは、滅び去った古の栄華のメタファーというのが、最も素直な解釈でしょう。ただ本日もお話したアゼルバイジャン共和国のナショナリスト詩人であるヴァハブザーダなどは、この一篇をアラス河南北へ離散した民族の悲劇を嘆く詩だと解釈しています。そういう異なる文脈の中に置くと、「シリアの廃墟」とは「本来ひとつなのに分断下におかれた」祖国そのものの「凋落、落魄」のメタファーとしての意味も帯びるとも言えるかもしれません。